

共同通信社原発事故取材班 高橋秀樹編著「全電源喪失の記憶—証言・福島第1原発 日本の命運を賭けた5日間」新潮文庫、新潮社2018年3月1日刊を読む

1. あれほどの原子力災害が日本国内で起きると誰が想像しただろうか。国際評価尺度(INES)でチェルノブイリ原発事故と並ぶ最悪のレベル7と評価された東京電力福島第1原発事故から7年が経過した。
2. 廃炉に向けた現場での作業は続いているが、原子炉から溶け落ちた核燃料(デブリ)をいつまでにどうやって取り出すか具体的なプランはまだ見えない。廃炉の工程を示した政府・東電の中長期ロードマップはたびたび改正されているが、「事故から30～40年」とした廃炉完了時期は一度も変更されないままだ。そもそも30～40年とは普通の原発の廃炉に要する時間である。事故直後にあわてて策定した工程だから仕方がないとはいえ、実現可能性は極めて低い。さらに数十年単位の時間がかかるだろうとの見方が専門家の間でも支配的だ。おそらく廃炉完了には100年近くかかるだろう。気の遠くなるほど長い道のりである。事故を実体験として記憶する人々はその時、もう誰も生きてはいまい。
3. 私たちが忘れてならないのは、避難を強いられている福島県民がいまだ約5万人もいるという事実である。原発事故により長年住んだ我が家を追われ、たくさんの思い出が詰まった故郷に帰ることができなくなった人々が大勢いるという現実。福島を襲った原子力災害は遠いところの出来事ではない。読者の皆さんには是非、自分に置き換えて考えてみてほしい。
4. 事故はまだ何一つ、終わっていない。
5. 本書は共同通信社が2014年3月から7月にかけて全国の加盟新聞社に配信した長期連載「全電源喪失の記憶 証言・福島第1原発」全84話と、15年4月から16年2月にかけて配信した続編「全電源喪失の記憶 証言・1F汚染」全129話が元になっている。事故が最も過酷な経過をたどった発生直後に焦点を当て、関係者が「何を見て」「何を思ったのか」を、実名による証言ででき得る限り再現した「実話」である。政府や国会などの事故調査委員会がまとめた報告書には全くといっていいほど触れられていない、事故の側面の一つだ。
6. 取材対象者は100人をゆうに超えた。第1原発所員、協力企業作業員、地元住民、政治家、自衛隊員、男性も女性もいた。格納容器ベントに関して尋ねた時、「もっとひどいことにならないようにやったことではあったけれど、地元^{たず}に申し訳ないことを……」と泣き崩れた元所員がいた。第1原発から約650人が退避した際、免震重要棟に残った所員の1人は「一緒に残った部下を死なせてしまうと思っていた」と涙した。
7. 証言から浮かび上がるのは、原発事故を通じた人の使命感や誇り、地域への愛着や責任、家族

への愛情、そして過信や傲慢さ、無理解の怖さである。

読者の皆さんと同じ生身の人間がある日突然、死をも覚悟せざるを得ない絶望的な状況に直面した時、何を思って、どう行動したのか。その記憶を後世に残すことが本書の最大の狙いである。故に反原発とか原発推進とかいう議論に本書は与しない。事故が誰のせいで起きたかという犯人捜しや事故原因の究明も目的とはしていない。第 1 原発所員を英雄視するつもりも、事故対応を美談に仕立てる考えもない。そもそも、被害がさらに拡大しなかったのは単なる偶然に過ぎない。だからといって原発は危険なものだと、ことさら強調するつもりもない。

8. 第 1 原発所員の多くは福島県出身者だ。地元の高校や高専を出て東電に入社した。家族とともに暮らす自宅は原発の周辺地域にあった。友人、知人も大勢いた。彼らは大切なものを守ろうと、そこに踏みとどまったのだ。自分たちの会社が「原発は安全」と言い続けてきたことへの責任もあっただろう。彼らにとって原発を守ることは故郷を守ることと同義であった。

9. 勇気をもって実名で証言していただいたことに、この場を借りてあらためて感謝申し上げたい。日本人が誰も経験したことのない過酷な原発事故の現場を目の当たりにしたからこそその証言は、事故の教訓を考える上で貴重な資料となるはずだ。

記憶は時を重ねるにつれ薄れ、欠けていく。誰でも 3・11 を思い出す時、鮮明に覚えている光景があるはずだ。だがその光景を取り巻く細かい出来事、誰かとのやりとり、自分の行動といったものはどこまで思い出せるだろうか。第 1 原発事故を経験した人々の記憶もまた例外ではない。だからこそ関係者の記憶は一つ一つ残しておかなければならない。

10. 東京地方裁判所では、大津波を予見できたのに対策を怠り事故や避難で死傷者を出したとして業務上過失致死傷罪に問われた東電旧経営陣の刑事裁判が続いている。事故を防ぐことができなかった東電という企業の罪は重い。原発を積極的に活用し、電力業界とともに安全神話を創り出した政府も同罪である。さらに言えば、原発の危うさに何となく気付きながら、漫然とその存在を許容してきたわれわれにもまた責任はあるはずだ。そのことを努々、忘れてはならない。

11. 安全とは何か。命の尊さとは何か。原発はどうあるべきか。そしてわれわれは何をすればよいのか。

12. 読者の皆さんにも是非、立ち止まって考えていただきたい。本書がその一助になれば幸いである。

13. 取材に当たっては共同通信社の同僚である國分伸矢、太田久史、前田有貴子、篠原雄也、小野田真実、兼次亜衣子、三浦ともみ各記者の労苦を惜しまない仕事ぶりに大変支えられた。

14. 事故による避難やその後の長引く避難生活で亡くなられた県民の方々、津波により 4 号機地下で命を落とされた第 1 原発所員の小久保和彦さん、寺島祥希さん、そして元所長の吉田昌郎さんのご冥福を心よりお祈りする。

<コメント>

本書は、地域や日本、世界の未来を考える際の第一級の基本書、テキスト。また、「リスクマネジメント」「リーダーシップ」の第一級の基本書、テキスト。2011年3月11日の東日本大震災から今日まで福島第1原発で何が起きたのかを知ることは、現代に生きる我々一人ひとりの義務である。本書はそのために役立つと確信する。是非、ご一読を。

— 2018年8月31日（金）林明夫—